

Title	研究に没頭できる環境に身を置き、努力を積み重ねて得たもの：横森剛准教授に聞く
Sub Title	
Author	田井中, 麻都佳(Tainaka, Madoka)
Publisher	慶應義塾大学工学部
Publication year	2014
Jtitle	新版 窮理図解 No.18 (2014. 11) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000018-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



研究に没頭できる環境に身を置き、 努力を積み重ねて得たもの

ロケット好きだった少年が、長じて出会った「燃焼研究」の世界。勤勉な友人や研究室の優秀な先輩たち、さらには国際色豊かな教授との出会いや海外留学を経て、研究者として身につけたのは、日々の努力を怠らない姿勢だった。うまくいかないときでも、「コツコツ努力をすれば、必ず出口は見えてくる」と横森さんは力強く語る。

—どんなお子さんだったのですか？

スペースシャトルなどのロケットが大好きな少年でした。ロケットが空へ飛んでいく際に、お尻のところにエンジンから吹き出された炎がぼおっと光って見えますよね。その迫力に魅せられて、興味を持つようになったのです。今から思えば、当時から燃焼に興味があったのかもかもしれませんね（笑）。

それから、父親が都内で電気工事の会社を営んでいて、よく現場に遊びに連れて行ってもらいました。中学くらいからは現場で配線工事や機器の取り付け工事などの手伝いもするようになり、自然と理系に染まっていった感じです。

一方、小学生の頃から学習教室に通い、そこで数学の問題を

解く面白さに目覚めました。小学6年生の頃には、すでに大学の数学の問題まで進めていて、表彰されたこともあります。それでますます数学が好きになりました。僕は、褒められて伸びるタイプなんですね（笑）。親もわかっていたようで、「勉強しろ」と言われたことはありません。

将来を意識し始めたのは高校3年になってからでしょうか。父の仕事の影響で、電気工学科か機械工学科に進めたらいいなあ、と考えていました。浪人も覚悟していましたが、無事、慶應義塾大学理工学部で合格し、機械工学科に進学しました。

—どんな大学生活を送られたのですか？

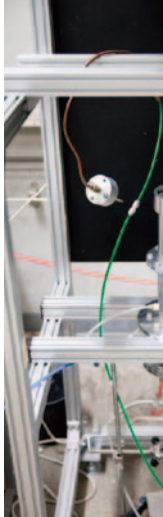
高校までは部活中心の生活でしたが、大学に入ってからガラリと意識が変わって、勉強中心の生活を送るようになりました。友人に恵まれて、互いに切磋琢磨しながら勉学に励んでいたのが、勉強自体は苦ではありませんでした。友人たちは皆、優秀で、私を含めて4人中3人が博士課程に進んだほど。もちろん、勉強だけでなく、一緒に遊んだり、成人してからは、週末ごとに飲んで過ごしたのは、今となってはいい思い出です。

—なぜ、燃焼の研究に進まれたのですか？

燃焼の研究をされている溝本雅彦先生の研究室を見学した際に、先輩たちから話をお聞きして、興味をもったのがきっかけです。研究室に入ってから、燃焼の魅力にすっかり取りつかれて、研究にのめり込んでいきました。

燃焼の研究というのは、実に奥が深いのです。たとえば、燃焼の事象をシミュレーションしようとする、流体、熱、物質の拡散、化学反応といったさまざまな要素を同時に解く必要があり、対象によってはスーパーコンピューターを使っても1カ月以上かかります。基礎理論の構築にも、まだまだやるべきことがあるというのが、燃焼の基礎研究の面白さといえます。しだいに基礎寄りの研究をしたいと思うようになり、博士課程に進むことにしました。

その後、2003年9月から東北大学でポスドクとして働き始めたのですが、ここでの経験が大きな転機となりました。とい



研究のアイデアは
突然生まれるものではなく、
1つひとつ積み重ねていくことで
形になるものです。

横森 剛

Takeshi Yokomori

埼玉県出身。1998年、慶應義塾大学理工学部 機械工学科卒業、2003年同大学院 理工学研究科 開放環境科学専攻博士課程において単位取得満期退学。2004年3月博士（工学）。東北大学 流体科学研究所産学官連携研究員、日本学術振興会 特別研究員、米国・プリンストン大学 航空宇宙・機械学科客員研究員を経て、2007年4月より慶應義塾大学 理工学部 機械工学科専任講師。2013年4月より現職。



うのも、研究室のポスの丸田薫先生は国際色豊かな方で、研究室に海外の著名な研究者がしょっちゅう訪ねて来るのです。そこでグローバルなコミュニケーションの大切さを学び、一気に視野が広がりました。

そして、海外留学を決意し、日本学術振興会のポスドクとして2005年4月から1年間、プリンストン大学へ留学することにしました。

——海外での研究生生活はいかがでしたか？

大変でしたね。最初は住む所も決まっていなくて、2週間くらいは先生などのお宅を転々としながら住まい探しからスタートしました。当時は英語もただたどしい状態でしたし、わずか2週間でホームシックにかかったほどです（笑）。銀行口座ひとつ作るのにも苦労した思い出があります。

大学にも、日本人はほとんどいなくて、別の学科に1人いたくらいだったでしょうか。むしろ中国から来ている留学生を多く見かけましたね。実は私の指導教官も Yiguang Ju 教授という中国の方です。この先生は、理路整然と考えて物事を進めることができるたいへん頭のいい方でした。性格もとてもよくて、研究者として憧れの存在です。

——やはり海外に出ることは必要でしたか？

ええ。四六時中研究のことばかり考えている研究者たちとつねにディスカッションをして、皆で考えていくスタイルを経験できたのはよかったです。現在の私の研究室も、プリンストン方式を踏襲しています。

研究者であれば、できるだけ早めに、30歳くらいまでには一度、海外へ出たほうがいいでしょうね。

——研究者として大切にされている信条はありますか？

研究のアイデアというのは、ある日突然、突拍子もないところから生まれてくることはありません。1つひとつ積み重ねて、はじめて形になるものだと思います。もちろんうまくいかないこともあります。がんばってればいつか出口は見えてくるもの。そうやって何かをつかむことができれば、大きな達成感を得ることができる。それこそが研究者としての醍醐味でしょう。

ちなみに、慶應の学生は、スマートな人が多いという印象があります。悪く言えば要領がいいんですね。そこに努力が加われば、怖いものナシでしょう。ぜひ、そういう力を身につけてほしいですね。

——休日はどのように過ごされていますか？

よく友人たちと温泉に出かけます。先日も、福島県の岳温泉というところに行ってきました。強い酸性のお湯が特徴の温泉で、最高でした。後は、ときどき日本酒を飲むことでしょうか。学生たちとも、たまに飲んでストレスの発散をしています。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

● どんなに忙しいときでも、困ったときには相談に乗ってくださる、真面目で頼りがいのある先生です。ただ学生を甘やかすのではなく、学生が自立できるように仕向けてくださるところは、先生ならではの。研究には厳しい方ですが、飲み会のときなどは、学生と一緒に思いつき騒ぐ、意外な一面もあります。

(取材・構成 田井中麻都佳)

さらに詳しい内容は
<http://www.st.keio.ac.jp/kyurizukai>